

大阪府八尾市、社会環境の変容と”子どもの居場所”づくりの必要性

浦上弘明（八尾市国際交流センター、大阪経済法科大学）

Necessity of Transformation of Social Environment and its "Child's Whereabouts" Creation, YAO-City, OSAKA Pref.

Hiroaki URAGAMI

(Yao International Center (YIC) and Osaka University of Economics and Law)

ABSTRACT

This research is a part of a comprehensive academic survey aimed at clarifying the Child's whereabouts history of the area and preparing documents of cultural heritage studies. Changes in the home environment and the social environment will greatly affect the growth of children who will be responsible for the next generation. In modern society, problems of child abuse and bullying that threaten children's lives are frequent. People in the information-oriented society are facing many problems such as an increase in human rights violation events caused by the flooding of information equipment. Intellectuals are struggling with their response. Adults are responsible for thinking about creating a place where children with shoulder in their heart can live with peace of mind. The author reports on the practice of "children's restaurant" which was launched for the first time in Yao-city. The summary of the practical report is summarized as follows.

① The wail of the children carrying the scratch of the heart. ② Children's saucer is. ③ "children's dining hall" was established to provide a warm place to the joy of living for children. ④ The ripple which established "children's cafeteria" experienced infinite surprises. ⑤ As a result, the author is flooded with calls for volunteering. ⑥ In addition, encounters with children with individuality are full of excitement and excitement. ⑦ The author considered the idea of the future cafeteria.

キーワード: 心の傷、子どもの貧困、子どもの居場所、子ども食堂 Child's Dining Room

Keywords: Emotional Damage, Child's Poverty, Child's Whereabouts, Children's Cafeteria

[洞窟環境 NET 学会 紀要 9 号][Cave Environmental NET Society(CENS), Vol.9(2018), - pp]

目次

1. はじめに
2. 心のキズを背負う子どもたちの嘆き
3. 子どもたちの受け皿は
4. 温かい居場所の提供・・・子ども食堂の設立
5. 波紋の大きさに驚きが
6. ボランティア希望の電話が殺到
7. 個性あふれる子どもたちとの出会い
8. 今後の子ども食堂のあり方
9. おわりに

1.はじめに

昔幼い頃、よく隣の家に預けられた記憶が鮮明に残っている。家が農家であったため、両親は朝早くから畑仕事、帰りは暗くなるまで帰ってこれなく、よく隣のおばちゃんにお世話になっていたのである。ご飯をごちそうになったり、風呂にも入れてもらったりしたことが思い出される。昔は、こういったご近所付き合いが当たり前で、お互いに助け合うコミュニティが存在していた。また、家の周りは畑や田んぼばかりで、学校から帰ると近所の異年齢の友だちと自然の中で、自分たちで遊びを考えて過ごしていた。

田んぼの畦道を走って、畔を壊して近所のおじさんに叱られ、親に知れたら大変なことになると心配しながら帰ったことを今思い出す。地域の大人の存在が大きかったような気がする。今振り返ると、子どもが放課後の時間帯に自由に遊べる空間が確保されていて、自然の中でのびのびと遊ぶことができ、成長に必要な要素や条件が整っていた時代であった。さらに、安全も保障されていていつも自分の周りには多くの大人がいて、見守ってくれていた。

ところが今はどうだろうか。地域の環境も自然が徐々になくなり、都市化し、子どもの遊び場もない状態、また核家族化の進行による家庭のあり方や親の価値観の多様化による家庭の教育力の低下、さらに社会問題化している子どもの貧困による子どもの成長への影響など、多くの課題が山積みされている。こういう状況の中、過去の教育実践並びに現在実践している子どもの居場所づくりについての研究と考察を論文としてまとめたものである。

2.心のキズを背負う子どもたちの嘆き

子ども食堂(Child's Dining Room, Children's Cafeteria)は、アメリカやイギリスでは貧困対策として、学校の放課後学習支援や始業前に朝食を出す「朝食クラブ」という取り組みがある。2010年、アメリカでは12万5千校のうち70%(8万7千校)にあたる。2007年、イギリスでは小学校46%、中学校62%が実施している。子どもの貧困撲滅の目的で、イギリス政府は学校へ出されている特別補助金による。2012年、ドイツのライプツィヒでは「ライプツィヒ市子どもと婦人の支援団体」により「子ども食堂」が開設された。単に子どもに食事を提供するだけでなく、調理の楽しさを教えながら、食事と健康について教えることを心掛けられている。

地域で食事を提供する活動は、日本の歴史上では昭和時代後期にすでに存在していた。1980年代には核家族化が進み、介護は家族ではなく社会全体で担うものとの考えが世間に浸透した。一方、独居老人に会食や配食を提供するボランティア活動が、全国で広く普及し始めていた。さらに、平成20(2008)年、子どもの貧困は、社会的に注目された。平成25(2013)年、待機児童問題は頃から表面化したと考え、子どもの貧困対策の推進に関する法律が成立し、日本全国で増え始めた。

日本の子ども食堂は、子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための社会活動である。平成22(2010)年、テレビなどマスメディアで多く報じられたことで動きが活発化し、孤食の解決、子どもと大人たちの繋がりや地域のコミュニティの連携の有効な手段として、日本各地で同様の運動が急増している。日本の子どもの貧困対策案を考える上での模範との声もある。

平成9(1997)年から3年間、大阪府立修徳学院に勤務していた時の子どもの悲痛な叫びが今でも私のに重く残っている。修徳学院は、児童自立支援施設とあって、児童虐待や非行に走った子どもたちが、心のキズを癒し、社会自立や自己自立を果たせるよう支援するための施設である。入所すれば寮舎(お父さん役の寮長、お母さん役の教母の二人で子どもの面倒を見ている。)に入り、寮長・教母夫婦の下で、温かい気持ちで子どもたちに接し心のキズを癒し、様々なことに挑戦させることで、自信を獲得させる場所である。よく少年院と間違えられる時があるが、少年院は更生施設で部屋には格子戸があり、逃亡できないようにしているが、児童自立支援施設は、自由に出入りでき、学校教育も行っている施設である。

修徳勤務1年目の出来事であるが、中学2年生の女子が入所のため来院。学校の先生、子ども家庭センターのケースワーカー、母親と本人が車で来所。みんな車から降りるのであるが、本人はなかなか言う

ことを聞かなく、しびれをきらした母親が子どもの腕を掴んで降ろそうとした瞬間、「お前のせいで、ここに入れられたんや！」と泣き叫ぶ始末。親子の関係が何らかの要因で断絶し、非行を重ねてきた女の子の悲痛な叫びが聞こえるのであった。

こういったショッキングなケースは学校現場ではあまり経験なく、教員を何十年も経験してきた私にとって、子どもの成長に係る教育の原点が見えてきたような気がしたのである。また、こんな事例もあった。小学5年生男児が祖母への暴力で一時保護されて入所した時のことである。祖母、学校の校長、担任、ケースワーカーそして本人が出席。なぜか親権者である父母の姿がなく、祖母に尋ねてみると、父も母もこの子が小さい時に離婚し、二人とも新しい家庭を持ち、幸せな生活を送っているとのこと。この男児は両親が離婚後、祖母が引き取り育ててきたというのである。本来、親が離婚して父母のどちらかが、親権者となり子どもを養育する義務があると思っていたので、どうしても不思議で仕方なかった。この子が小さい頃は、お小遣いも100円ぐらいですんでたのが高学年になるにつれ、500円を要求するようになり、渡さないと暴力を振るようになったのである。この男児にとって親の存在は全くなく、一生親を恨んで生きていく子どもの姿がそこにあるのである。学院に入所している子どもたちは、大なり小なり誰にも言えない心のキズを抱えて生きており、キズは消せないが、癒すことを目的に施設職員は日々子どもたちと接しているのである。

3. 子どもたちの受け皿は

今子どもたちの居場所が課題となり、いろんな場所で求められている。まず家庭はどうだろうか。本来子どもたちにとっての心の居場所は親であり家庭であるはずである。しかし、親の身勝手、過保護、放任、虐待などにより親子の信頼関係が築けず、愛情に飢えた子どもたちの姿をたくさん見てきたのである。家庭に居場所がない子どもたちの心をどう癒すことができるのか。また、どこが受け皿になりうるのかが大きな課題である。

また、今の学校はどうだろうか。楽しいはずの学校がいじめやいじめが原因で不登校に陥ったり、また、その後引きこもりになっていく子どもの実態がそこにある。いじめについては、6年前に大津市で生じた中学生の自殺事件をきっかけに、学校だけでなく社会全体の問題になっている。いじめ予防やいじめが生じた時の対応が学校や社会全体で取り組む気運に繋がっている。しかし、いじめによる自殺は後を絶たず、その対応策に苦慮している状況である。「いじめ0」の取り組みは、各学校で進められており、互いの人権を尊重する意識・態度を醸成することや、命の尊さを幼いころから様々な体験の中で培う事、また、道徳の時間の活用や学校のすべての教育活動の中で、人権を尊重する教育を実践しているのである。しかし、現実はどうであろうか。いじめに近い事象は日々起こっているのである。また、教師自身の人権感覚も大きな課題でもある。子どもたちの行動や言動を観察する中で、適切な指導や注意が瞬時にできるか否かによって、いじめを未然に防止できるかが決まってくるのである。家庭に居場所のない子どもたちが、心温まる場所として受け皿となるよう学校としての役割を果たしてほしいと願うばかりである。

一方、地域の受け皿はどうであろうか。放課後の時間帯子どもたちの姿が、地域ではほとんどみることができない。学校から帰宅し塾や習い事に追われ、また家で友だちとゲームをして遊び、外ではほとんど遊んでいない状況である。子どもたちが安心して屋外で遊べる環境ではなくなったのもその要因ではあるが、子どもたちが元気に活動できる受け皿が地域には無くなっているのである。また、親の価値観の多様化や変容も大きな受け皿をなくしている原因でもある。自治会や子ども会への加入率の低下がバロメーター。私が小学生時代誰もが加入していた子ども会、今思い出されるのが、夏休みの町内清掃、ソフトボール大会、クリスマス会など多くの行事があり、地域の大人の方と一緒に活動したことを懐かしく思い出される。いろんな行事に参加することで、地域の歴史や食文化、地域の素晴らしさを自然と学んだものである。昔は地域に受け皿があったのである。寂しい想いを余儀なくされている子どもたちに温かき居場所を提供してあげることが、私たち大人の役割ではないだろうか。

4. 温かい居場所の提供・・・子ども食堂の設立

平成28年3月八尾市教育長を退任し、第三の人生をスタートすることとなる。以前から、社会問題となっていた「子どもの貧困」対策として全国的に子ども食堂が開設され、マスコミ等

で報道されるようになり、私自身も非常に興味を抱いていたのである。私なりの教育の原点は、子どもの心の背景に寄り添い、子どもの想いを理解することから、子どもの将来や現在の目標達成に向けた支援を行うものであると考えていたため、公務員の冠が取れたら、いつか「子ども食堂をやってみよう」と夢を膨らませていたのである。絶好の機会がやってきた。3月末で教育長退任が決まり、一刻も早く「子ども食堂」を開設しようと決意し、まずはコンセプトを固めることに終始した。「子どもたちに温かいご飯を食べてもらおう」を旗印に、地域の方々に呼びかけ賛同していただいた方々とボランティア組織「夢うららほっとステーション」を6月8日に立ち上げたのである。八尾初の子ども食堂誕生であった。

立ち上げまでには、課題も多く何度もミーティングを繰り返したが、まず「スタートを切ろう！」という共通理解のもとで開始したのである。初日は、子どもたちが来てくれるかとても心配であったが、10人ほどの子どもたちが参加してくれて、みんな神様のように思えたのであった。一番大きな課題は、私にとって行政や地域の既成団体の壁であった。子ども食堂の案内チラシを配布していただくために、市役所の窓口で依頼に行っても趣旨には賛同できるが、配布は出来ないと断られ、また、地域では回覧板で周知してほしいと依頼に伺っても市の後援がないと回覧できないと跳ね返され、壁の高さに改めてその難しさを痛感した。そのため周知は、ロコミとスーパーマーケット等の店頭での配布しか方法がなくなぜか惨めさを感じる。



図 4-1 はみんなで「いただきます」のかけ声で食事がスタート。定番メニューはカレーライスと毎回変わる副菜と果物。みんな笑顔でわいわい言いながら楽しい食事である。図 4-2 は食事が終わった後はお勉強。宿題や自主学習の道具を持参。学習支援のボランティアさんが学校の授業とは違ったムードで自主学習のお手伝い。子どもたちも真剣に勉強。図 4-3 は季節折々の題材を考えて子どもたちに工作を提供。美術の専門家がボランティアで指導。完成した時の子どもたちの喜ぶ笑顔は最高。自慢げに見せてくれる子どもたちの顔には達成感が満ち溢れる風景である。

5.波紋の大きさに驚きが

八尾市内でも波紋が広がっている。昨年6月に「夢うららほっとステーション」がスタートし、子ども食堂に興味を持たれている方々が、多数見学に来られた。「自分たちも食堂をやりたい。」「子どもたちに食事を提供したい」という想いの方々がばかりである。私の経験談をその時にお伝えし、いろんな課題はあるにせよ、とにかくスタートさせることが大切である旨の話をしていたことを思い出す。日を追うごとに市内のあちこちで食堂がオープンし、「夢うららほっとステーション」がパイオニアとしての役割を果たせたと考えている。

また、この波紋のような広がりには、「子どもの居場所づくり事業」として八尾市が補助金制度を導入し、各団体の活動に対して支援をするまでに至ったのである。現在八尾市内では12団体が「子ども食堂」を運営されており、それぞれ団体の想いが違い、いろんなパターンがあり、独自のやり方がある面白いものである。

6. ボランティア希望の電話が殺到

年間通じて何件の電話があったらうか。八尾で子ども食堂がスタートしたという情報がマスコミ等で報道され、いろんな方々から問い合わせがあった。「高齢の方で昼間は時間があるので是非調理をさせてもらえないか。」「小さい子どもがいるが何かお手伝いさせてもらえないか。」というような電話がよくかかってきた。そのたびに、「お手伝いしていただけるならありがたいことで、是非一度見学に来てください。」と返答、多くの方が見学に来られ現在もボランティアとして参画していただいている。孫の手も離れ時間を持て余している方、地域で民生委員をされていて子どもの支援をしたい方、その他何か地域に貢献したい人が多いようである。活動時間は自由、例えば調理にだけ参画する方、食事の配膳や洗い物をされる方、学習や工作を主として教えてくださる方、子どもを自宅まで送り届ける方など様々で、皆さん笑顔で遣り甲斐を感じて参画していただいている。

また、最近特に多いのは、大学生や高校生で「子どもの貧困」や「子ども食堂」に興味があるという理由でよく問い合わせがあり、面談してボランティアとして活動してもらっている。特に意識の高い大学生は、将来教職を目指したいからとか、いろんな経験を今しておくことが、将来の自分の生き方の参考になるというように、とてもしっかりした考え方を持っている学生さんたちである。子どもたちも兄ちゃん姉ちゃんと慕い、子どもたちも毎回会えるのを楽しみにしているようである。ところで、「夢うららほっとステーション」のボランティア構成であるが、主に地域の「読み聞かせ会」のメンバーさんと八尾市BBS会の二つの団体の有志の皆さんで成り立っており、先述した高齢の方や学生さんたちがその中で一緒に活動されている。みなさん「子どもたちに温かい食事を提供し温かなほっとな居場所を作ろう」をコンセプトとしての活動である。

7. 個性あふれる子どもたちとの出会い

7-1. ランニングで元気のよい子どもの姿

子ども食堂に来る子どもたちは様々で、とても元気のよい子どもたちが多い。夏も冬もランニングシャツで来る元気のよい子を紹介したい。この子が子ども食堂に参加するようになったのが、丁度半年ぐらいになるだろう。同じマンションに住んでいる3人のうちの一人である。最初保護者の方が、小学校の学童保育で配布された子ども食堂の案内チラシを見て、参加申し込みされたのである。実は親が遅くまで働いているので月二回でも夜預かってほしいということで来られたのである。また、同じマンションに住んでいる友だち二人も一緒にお願ひしたいとのことであった。

三人とも一回も欠席なく皆勤で元気に来ている。元気過ぎて、部屋で暴れたり、走ったりするためボランティアから再三注意を受けている子どもたちである。中でも小5のA君は夏も冬もランニング姿、「ランニングやと寒いやろ!」と聞いてみると、「僕暑いねん!」と笑顔で返すのである。家のことは一切語ろうとしないA君、その笑顔の背景には、愛情を求めている子ども心が見え隠れするのである。

ある日のことである。いつもみんなで「いただきます。」と言って食事を開始するのであるが、その日は、A君がしきりに私の話に対して、素直に聞き入れない言動があったため、良い機会だと思い、みんなの前できつく注意すると、自分の言動がみんなに迷惑をかけていることに気付いたのか涙ぐむシーンが見られた。食事の後、ボランティアのIさんが、A君に、「本を読む。隣の図書館で本を借りに行こうか?」と声をかけると、「行く。」と言ひ本を借りに行ったのである。その後、自習室で最終の時間までずっと読書。いつもはしゃぎ回っているA君の違う一面に出合ったのである。私も気にはなっていたので話しかけてみると、「4冊本を借りたんだ。本を読むのが好き。」と先ほどの涙ぐんでいるA君の表情とは違った嬉しそうな表情が見れて私も一安心。子どもは何かのきっかけで、変わるものである。これからA君がどのような成長をしていくのか今後楽しみである。

7-2. 不登校である中3生がボランティアに

今教育界だけでなく社会問題にもなっている「不登校問題」年間12万人を超える勢いで、何らかの理由により学校に行けない子どもがいるのである。理由はその子どもによってさまざまであるが、その理由を

見つけることすらできない子どもたちも多い。私も40年以上教育関係に携わってきたが、学校現場での不登校問題は、とつても大きな課題でもあった。家庭の経済状況、保護者の意識、親子関係、学校での友だち関係や教師との関係、その他さまざまな要因があり、問題の解決には相当な時間を要するが、過去の経験から地道に子どもの心に寄り添うことが一番大切であると思っている。

ところで、偶然中学三年生の男子生徒（不登校で学校には行けていない）と出会う機会があった。彼は、とても将来のことを真剣に考えており、今いろんなことを経験する中で、自分の歩むべき道を模索しているようであった。たまたま、彼が「子ども食堂」に興味を持っているということから、ボランティアでの参画を勧めると喜んで受け入れてくれたのである。また、中学生にもかかわらず八尾図書館で私の自叙伝「ウラさんの教育人生40年」があり興味があったので少し読んでみた聞き、意識の高い子どもだと改めて感じたのである。

そして、子ども食堂当日、最初から調理に参加、エプロン・三角巾をして彼の母親よりも年配の女性から調理の仕方を教えてもらい手伝っていた。子ども食堂は誰でも気軽に来れる子どもたちの居場所。単なる場所ではなく、人とをつなぐ心の居場所になっていることがわかり、とても素晴らしい活動だと実感したのである。今後彼は、こういう経験を基にいろんな方と接することにより、より多くの宝物を得ることであろう。そして自分の目指すべきものを発見してくれるだろう。そう信じてやまない。

7-3. 中学時代不登校だった高校生がボランティアに

次に中学校時代、友だち関係に悩みまた退学傾向にあった不登校生徒の話である。彼女は友人との関係で不登校になったらしく中三の担任の先生に単位制の高校を勧められ無事合格。今は学校にも楽しく登校できているようである。その彼女の妹が子ども食堂に参加していて、一回覗きにきたのがボランティアを志すきっかけになる。今は勉強が忙しくなっており参加できていないがまた来てくれることを期待している。参加しているときは、常に小さい子どもたちの世話をしてくれ将来保育士を目指している。また笑顔あふれる性格で不登校であったのがうそのようであり、ほんのちょっとのきっかけで将来の目標が見つかり明かりが灯ったかのような表情をしている。彼女にとつても温かな居場所になっていることは間違いない。

8. 今後の子ども食堂のあり方

現在大阪府内には219ヶ所（平成29年9月1日現在）の子ども食堂が設立されており、八尾市においてはすでに12ヶ所開設されている。また、設立趣旨や活動内容も各団体で違いがあり、それぞれ地域性や特性があつてとてもいいものである。活動内容は、食事の提供はもちろんのこと、学習支援・遊び・交流・居場所・相談など様々である。また、対象もまちまちで小中学生だけを対象としているところや居世代間の交流を主にしているところ、また子育て支援を目的とした親子ふれあいの場などがあり、みんな心の居場所になっている。

私に関わっている「夢うららほっとステーション」、「にじいろほっとステーション」は、小中学生を対象に、また後者は外国にルーツのある家族や八尾市内全域から参加できる子ども食堂である。参加している子どもたちは、美味しいご飯をみんなで食べ、学習や工作に取り組んでおり、みんな笑顔で参加している。

今後の子ども食堂のあり方であるが、子ども食堂は、「子どもの貧困」対策ではなく、全ての子どもが利用できて温かな雰囲気の中で楽しく活動できる居場所であると考えている。また、いろんな境遇の子どもたちが食堂に来て、家庭や学校とは違った空間で、人間としての生き方を学ぶ場でもありと考えている。そういう意味においては、人間力の基礎を培う場でもある。

1年間に何人かの不登校の子どもたちが、子ども食堂を利用し、前向きに進もうとしている姿を見るたびに、子ども食堂の価値は大きいものであることを実感する。さらに、小学校・中学校時代に不登校に陥り、心に傷を背負い自信を無くしてしまった人が自信を回復し将来の目標を見つけ毎日頑張っている人や、青少年時代非行に走り、多くの方に迷惑をかけたが、現在は更生して毎日仕事に励んでおられる人など多くの方がボランティアとして参画していただき、食堂に参加している子どもたちにとっては、いろんな話が聞けて大きな支えになっている。このように、子ども食堂は子どもたちにとっての自分を見つける最高の居場所になっている。

9.おわりに

9-1.八尾市の古代

八尾市の古代は旧分国では河内国に属する。古代においては 河内湖がこの付近まで広がっていた。旧大和川流域の肥沃なデルタ地帯として、弥生時代から耕作が行われた。古墳時代には多くの豪族がこの地一帯に勢力を維持し、生駒山地の麓に数多くの陵墓を造築した。その多くが現在でも古墳として残っており、その数の多さから千塚(せんづか)という地名として残っている。飛鳥時代には、一帯は物部氏の勢力圏下にあり、その武具を製造する集団が居たとされているが、物部氏は物部守屋のときに蘇我馬子とこの一帯で戦い敗れたために滅亡した。物部氏傍系一族の弓削氏、来栖氏、矢作連などは引き続きこの一帯で勢力を維持し、特に弓削氏の道鏡は奈良時代後期の日本における実質的な最高権力者となっている。道鏡は当地(現在の中田・八尾木地区あたり)に西京(由義宮)を造築したが、失脚とともに歴史に埋もれてしまい、現在でも遺構は判明していない。

朝鮮半島での白村江の戦いで敗北した大和朝廷は唐の侵攻に備えるために西日本で古代山城などの防御施設の整備を進め、この時高安山にも高安城が築かれたとされる。1978年に高安山の東側で遺構が検出されたが、後に壬申の乱以降に再建された高安城の倉庫であると判明。しかし、1999年の調査で高安山頂の北西約300メートルの場所で花崗岩を二段積みした石垣がおよそ100メートル続いているのを検出。その後の調査などから城壁の高さは10mを越えるものであり、高安山の西側に張り出した尾根の先端を平坦に整地してあり、その周囲に石垣が構築されていたことがわかっている。

八尾市は近畿地方で、大阪府にある。面積は41.72km²、総人口は267,581人(推計人口、2017年10月1日)、人口密度は6,414人/km²である。隣接自治体は、大阪市、東大阪市、柏原市、藤井寺市、松原市 奈良県:生駒郡平群町、三郷町である。市の木はイチョウで、市の花はキクである。

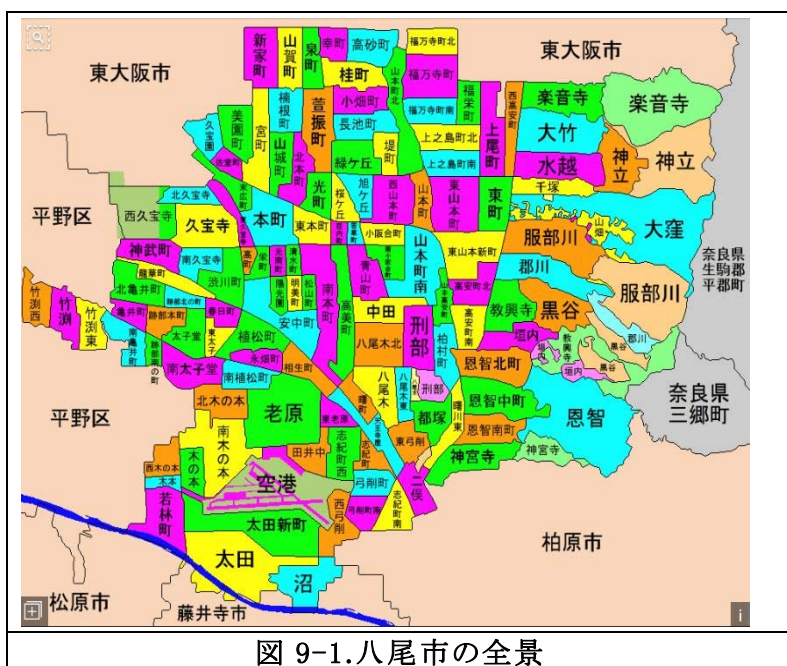


図 9-1.八尾市の全景

9-2.八尾市の概要

大阪平野の中部、大阪市の東南部に隣接し、市域西側は概ね平坦で標高は10m程度である。市の東部は高安山をはじめとする急峻な生駒山系が控えており、奈良県との府県境を形成している。市の南端を大和川が流れる他、旧大和川水系である長瀬川、玉串川などの小河川も見られる。市の南部には八尾空港があり、陸上自衛隊の駐屯地や民間の小型航空機に供用されている。平成19(2007)年に工業出荷額で東大阪市を抜き、ものづくり都市である同市を上回る産業力を持つ都市である。平成25(2013)年6月3日、日本維新の会共同代表で大阪市長の橋下徹と幹事長で大阪府知事の松井一郎は米軍の新型輸送機オスプレイの訓練について八尾空港を候補地として国に提案したが、地元の田中誠太八尾市長は受け入れ反対を表明した。

9-3.八尾市の教育関係

大学は大阪経済法科大学。高等学校では、公立(大阪府立八尾高等学校と大阪府立山本高等学校)府立(大阪府立八尾北高等学校と大阪府立八尾翠翔高等学校)と私立(金光八尾高等学校)である。

9-3.八尾市の子ども食堂

子ども食堂は、「子どもの貧困」という大きな社会的課題として大きくクローズアップされ、全国的に関心が高まる中、多くの自治体において、子ども食堂を支援するための施策の推進や補助金制度の活用などを図っている。八尾市においても平成 29(2017)年度より「子どもの居場所作り」事業として補助金制度の導入により、市内9団体が子ども食堂の運営に補助金を活用している状況である。あくまで「子どもの貧困」対策は行政の役割であり、子ども食堂が子どもの貧困対策を担っているわけではなく、子どもたちの心温まる居場所である。「子ども食堂」の住所は八尾市龍華コミュニティセンターで、八尾市南太子堂2丁目1番45号(高さ9.9m)である。

今後、筆者が思い描いている子ども食堂は、地域コミュニティ復活のためである。ご近所同士が子どもの成長のために助け合う姿勢を共有し、自分の子どもだけでなく地域の子どもをみんなで見守る地域づくりが今必要であると考えている。そうすれば、子どもたちは地域の温かさを感じ、地域を愛する子どもに育ち、自ずと青少年非行も減少するものであると確信する。これからも地域に根ざした「子どもたちを支援する活動」に微力ながら力を投じたいと考えている。

謝 辞

論文作成時には、八尾市役所の関係各位から助言を頂きました。一方、査読には大阪経済法科大学の関係各位に感謝申し上げます。市の補助金：八尾市子どもの居場所づくり補助金（平成 29 年度から）申請団体・・・夢うららほっとステーション（代表：浦上弘明）

(2017年12月1日受稿、2018年1月25日掲載決定)

参考文献

- 1)朝日新聞取材班;『子どもと貧困』、朝日新聞出版、2016年。
- 2)大江正章;「つながりをつくる、こども食堂 貧困の歯止めと可視化に」、『世界』第 882 号、岩波書店、2016年。
- 3)小林野渉;「子ども食堂に行ってみた」、『仕事文脈』、タバックス、2016年。
- 4)近藤博子;「子どもの居場所をつくり、孤立を防ぐ -「こども食堂」第 1 号店からの発信-」、『月刊保団連』第 1225 号、全国保険医団体連合会、2016年。
- 5)玉居子泰子;「地域をつなげるこども食堂」、『東京人』第 31 巻第 5 号、都市出版、2016年。
- 6)豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著;『子ども食堂をつくろう! 人がつながる地域の居場所づくり』
- 7)室田信一;「子どもの孤独感を埋めるみんなの居場所」、『児童心理』第 70 巻第 19 号、金子書房、2016年。
- 8)浅井春夫;『「子どもの貧困」解決への道 実践と政策からのアプローチ』、自治体研究社、2017年。
- 9)釜池雄高;「こども食堂は、何のための場所?」、『生活と福祉』第 735 号、全国社会福祉協議会、2017年。
- 10)齋藤美保子;「子ども食堂の広がりは何を意味するのか」、『家教連家庭科研究』第 339 号(8月号)、家庭科教育研究者連盟、2017年。
- 11)田原牧;『人間の居場所』 集英社〈集英社新書〉、2017年。
- 12)田中まさみ;「子どもにもひらかれた「誰でも食堂ハーモニーカフェ」」、『食べもの文化』第 511 号、芽ばえ社、2017年。
- 13)浦上弘明;「愛が子どもの心開く(自叙伝)」、毎日新聞、2017年。
- 14)浦上弘明;「子どもの心開くウラ話」、読売新聞、2017年。
- 15)浦上弘明;「<調査実践報告>40年間の歩みから見えてきたもの—それは子どもの健やかな成長を願うこと—」、大阪経済法科大学地域総合研究所紀要第 9 号、2017年。
- 16)浦上弘明;『ウラさんの教育人生 40 年』、清風堂書店、2017年。